

# 強者の戦略

論述世界史〔2018年 東京大学 前期 第2問〕

東京大学の出題で古代インドを扱ったものにチャレンジしていただきました。

東大は古代から現代まで幅広く出題があり、苦手な時代があると時にはそれが致命的なダメージになることもあります。また、つい600字あるような第1問(通称「大論述」)にばかり目が行きがちですが、第2問の短文と、第3問の10個程度の一問一答で半分くらいの点数と想定されますので、これができなくては話になりません。短文の対策もまずは過去問を使って、慣れていく必要がありますね。

## <時代背景の確認>

問題の(a)(c)ともに、前500年前後に現れた古代インドの新宗教である、仏教やジャイナ教についてです。

前1500年ごろのアーリヤ人がインドに移住してからは、自然現象を神格化し、その祭祀が重要となりました。次第にバラモンと呼ばれる人たちが社会で力を持つようになりました。こうして自然信仰に基づくバラモン教が生まれ、司祭階級のバラモンが頂点の身分制度であるヴァルナが形成されました。

前6世紀ごろまでにガンジス川流域に多くの都市ができ、それが独立した政治の単位となって争いを繰り返すようになりました(十六大国時代)。その中で祭祀の形式に重きを置き、バラモンだけが特権を持ち、またバラモンだけが解脱できるなどと説いたバラモン教への不満が高まり、そのバラモン教に飽き足りない思想家が現れ、新しい思想や宗教が生まれるようになりました。

前500年前後にガウタマ=シッダールタによって仏教が、ヴァルダマナーナによってジャイナ教が生まれます。仏教は主にクシャトリア階級の支持を受け、ジャイナ教は特に商人階層に多くの信者を得ることになりました。

前4世紀以降はインド北部を中心とする王朝が生まれると、マウリヤ朝ではアショーカ王が仏教を重んじ、その思想の影響を受けた普遍的倫理である「法(ダルマ)」を統治の理想にかかげます。クシャーナ朝では諸宗教に寛大であり、仏教が多いに栄えます。その中から大乘仏教が生まれました。大乘仏教は中国や朝鮮半島、そして日本に伝わります。

## <問われていることを確認>

(a)で問われているのは「仏教やジャイナ教に共通のいくつかの特徴」です。特徴や特質という言葉は、何かと比べて特に目立っていたり、他との区別に役立ったりする点を指しますが、ここでは共通の特徴、ということですので特徴≒内容、と考えて共通しているところを挙げてみましょう。

仏教もジャイナ教もいずれもバラモン教への不満が背景にあって生まれた宗教ですね。ということは、バラモン教のことを一つ一つ確認していかなくてはなりません。それらを否定して新宗教が生まれたわけです。

バラモン教の聖典は『ヴェーダ』です。新しい宗教ではこれを否定することになりますね。そしてバラモンがどんどん儀礼を複雑にしたことや、輪廻転生を強調し、バラモンしか解脱できないと説いたことなどは大きな不満だったでしょう。「儀式ばかり複雑にしゃがって、うんたらかんたら祈ってるだけで、なんであんなにいばってんねん!」という気持ちだったでしょう。こうしたバラモン教に、当時ガンジス川流域の戦乱の中で台頭したクシャトリアやヴァイシヤの階級が新宗教を支持することになります。

(c)ここで問われているのは大乘仏教の特徴です。紀元前後とありますが、この頃はインド北部ではクシャーナ朝が成立した時期で、デカン高原ではサータヴァーハナ朝が栄えた時期です。どちらも東西交流が盛んな時代に活躍した王朝です。クシャーナ朝

# 強者の戦略

ではガンダーラ美術と呼ばれる仏教美術が栄え、仏像が作られるようになります。そして大乘仏教がこれまでの仏教から派生して生まれていきます。

これまでの仏教は上座部仏教(小乗仏教)です。今回は「大乘仏教の特徴」ですから、先ほどの問題にあったように、特徴や特質という言葉は、何かと比べて特に目立っていたり、他との区別に役立ったりする点を指しますので、上座部仏教と大乘仏教を比較してみましょう。実は入試でものすごく問われるテーマの一つです。

上座部仏教は出家して個人で修業し、個人での解脱を目指しました。一方で大乘仏教では、こうした個人の解脱だけを目指した修業を批判します。ちょっと聞きなじみがないかもしれませんが大乘仏教では「利他行」を重視します。利他行とは他人の苦しみを取り除き、他人が幸せになることを自らの幸せとすることです。そして菩薩信仰があり、できるだけ多くの大衆を救済しようとします。他力本願の思想が強いですね。ちなみに「小乗」という言い方は大乘仏教からの侮蔑の意味がこもっているということであまり使わない方がよいです。

では、以上をヒントに解答を作成してみましょう。

## 【解答例】

(a) バラモン教の聖典『ヴェーダ』の権威や祭式万能主義、バラモンが頂点のヴァルナ制を否定し、修行による輪廻からの解脱を説き、バラモンに対抗する新興のクシャトリア・ヴァイシャの支持を得た。(90字)

(b) ウパニシャッド哲学

(c) 従来の上座部仏教の、出家と厳しい修行による個人の解脱を目指したことを独善的と批判し、「利他行」や菩薩信仰を特徴とし、他力本願を強調し、出家・在家を問わず広く衆生の救済を求めた。(88字)

問われやすいテーマなんですけど、いざ説明しようとするとなかなか的確には書きにくいものです。教科書に加えて用語集でしっかり内容を確認しておきましょう。

論述世界史〔2013年 東京大学 前期 第2問〕

さてこちら東大の短文です。テーマは古代ローマ。よくわかっている内容ではありますが、いざ問題となると、不足なく言葉にするのは難しいですね。では時代背景から確認していきましょう。

## <時代背景の確認>

今回のテーマはキリスト教。その後のヨーロッパの、信仰というだけでなく価値観の土台となるものです。よく問われるテーマでありますし、学習の上で非常に重要なテーマになります。

ローマの属州であったパレスチナに誕生したイエスはユダヤ教の神殿の祭司や厳格な戒律主義を説くパリサイ派を批判して、新しい教えを民衆に説きました。当時ローマに協力していたユダヤ人支配層に苦しんでいた民衆は、**神の愛や隣人愛を説くイエスの教えを信じ、救世主としてのイエスに従いました**。しかしイエスを憎む層によって彼は犯罪者とされ、政治犯として**西暦 30 年頃に十字架刑で処刑**されました。死後は彼が復活したという信仰が生まれ、**ペテロやパウロなどの使徒たちによってその教えが広められキリスト教が形作られていきます**。特にパウロの布教によって次第にユダヤの民族宗教の枠を越えて、**世界宗教への発展**していくことになります。

ローマ帝国はもともと民衆の信仰に寛容でしたが、キリスト教徒の生活はローマ住民からは奇異な目で見られ、誤解もあって危険視されるようになりました。**ローマの神々への信仰を拒否したこともあって、無神論者と考えられたり、反社会的集団と見なされたりするようになり**ました。帝国政府は取り締まり

# 強者の戦略

ますが、棄教せずに信仰のために進んで死を選ぶキリスト教徒の態度は、より多くのローマ系住民の理解を得られずに敵視されるようになりました。しかし彼らはカタコンベなどで信者を増やしながら信仰を続けていきます。その中で独自の神学大系を構築していきました。

## <問われていることの確認>

(a)「迫害された理由」が問われています。ネロ帝ぐらいからディオクレティアヌス帝時代ぐらいまで迫害が続きます。特に一神教だったキリスト教徒がディオクレティアヌスの時には皇帝崇拝を拒否したことは有名ですね。元々ローマ帝国では多くの神を崇拝しており信仰にはそれなりに寛容であったのですが、先述のようにローマの神々への祭祀の参加を拒否したこともあり、反社会的集団と見なされました。これが大きな理由ですね。

(b)問われているのが、「皇帝にどのように公認されたか」、「皇帝の名前と公認の理由に触れながら」です。キリスト教公認といえば、コンスタンティヌス帝、そして彼がローマを統一する前の313年のミラノ勅令、というのはよく知っていることだと思いますが、もう少し知識を確認しましょう。

ディオクレティアヌスの「最後の大迫害」があっても信者は増えていきました。元々キリスト教徒は女性や奴隷など社会的弱者に多くの信者を抱えていました。ところが「ローマの平和」の時代に市民が墮落していく中、隠れて信仰を守り続け次第に上層市民に信者を増やしていきます。コンスタンティヌス帝の時代にはキリスト教徒の数は無視できないものになっていました。彼は四帝分治制の西の副帝でしたが、皇帝たちの争いの中でキリスト教徒を味方につけるために313年にミラノ勅令でキリスト教を公認し、325年には教義をめぐる論争を解決するために、ニケーア公会議を開き、正統教義を定めていきました。

では知識を整理したところで、解答を作成してみましょう

## 【解答例】

(a)キリスト教は一神教のためローマの多神教の神々の祭祀や皇帝崇拝を拒否し、帝国統治を阻害する反社会的集団とされたから。(57字)

(b)信者が社会的弱者から上層市民まで帝国全土に拡大し、帝国統治維持のためコンスタンティヌス帝が313年にミラノ勅令で公認した。(60字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と気になるところが出てくると思います。その際は遠慮なく質問してください。

ではまた次回、お会いしましょう

北林久忠